

篠山市における情報提供事業とその成果

～地域コミュニティをつなぐ取組～

1. 篠山市視聴覚ライブラリーのあゆみ

(1) 開設から40年を振り返って

篠山市視聴覚ライブラリーは、昭和47年に多紀郡視聴覚ライブラリーとして設立し、以後、地域映像資料の収集と視聴覚教育の推進に取り組んできた。この間、度重なる行政組織の改編があり、昭和49年には篠山町教育委員会への業務委託が行われ、昭和59年には多紀郡視聴覚ライブラリーの解散により、篠山町視聴覚ライブラリーと西紀、丹南町視聴覚ライブラリーに分割となった。そして、平成11年4月の篠山市発足と同時に再び統合し、以後、篠山市視聴覚ライブラリーとして現在に至っている。

特に平成15年10月からは、新設された篠山市立中央図書館に併設となったことから、図書館機能と連動した情報発信、映像文化の進展にも力を注いでいる。

多紀郡視聴覚ライブラリーの時代から、郷土に密着した学習教材を制作。篠山市発足当時は、広域化した篠山市の事業や取組を知ってもらうために、市内の情報を「ニュースボックス」（平成12年度から「地域コミュニケーションビデオ“情報ネット篠山”」に名称変更）としてビデオテープ化し各自治会（集落）に配布した。内容は、地域づくり・伝統行事・イベント・学校行事などの身近な話題や、歴史・文化・風土などの地域に根ざした映像の記録などであった。（このビデオテープ配布は平成19年度で終了）

さらに、編集室を市民に開放してビデオ映像の編集の指導や補助を行ったり、「コンピュータ講座」、「ビデオ講座」などを開催したほか、平成13年7月にホームページ「丹波篠山インターネットTV」を開設し、インターネットでの動画配信を開始した。

平成16年11月には、篠山市内に光ファイバー網によるケーブルテレビのコミュニティチャンネルが設置され、篠山市の自主制作番組の放送を始めた。しかし、アナログ放送のチャンネルであったため、地上波放送の完全デジタル化移行前の平成22年度末に放送を終了した。

また平成14年からは、篠山市の夏の風物詩「丹波篠山デカンショ祭」のインターネットライブ中継を開始。平成23年からは動画配信サービス「USTREAM」を使い、市内



積み重ねてきた活動実績



ビデオテープによる地域映像の紹介

のイベントやフォーラムのライブ中継にも取り組んでいる。

(2) 中央図書館との併設

本施設は、前述の行政組織改編により、設置場所を転々としてきた。篠山市発足後の施設移転の際、候補に挙げたのが本庁舎の教育委員会事務局内であったが、「情報発信の拠点」という観点から、平成15年4月に開館した中央図書館に併設となった経緯がある。

図書館の併設にあわせて、利用者の利便性を高めるため貸出の窓口を一本化。図書館利用者カードがあれば、本やビデオ、視聴覚機材が図書館のカウンターで借りることができるようになった。そのため、視聴覚ライブラリーで所有していた市販のビデオや自作の視聴覚教材の貸し出し管理及び新刊購入業務は、図書館へ移管した。現在



平成15年10月から中央図書館に併設

は、視聴覚ライブラリーで自作したDVDやBDも書架に並べ貸し出している。また、視聴覚機材の詳しい利用方法の説明やメンテナンスについては、視聴覚ライブラリー職員が対応している。

図書館と視聴覚ライブラリーが連携することによって、多様なサービスの提供が可能となったほか利用者増にも繋がっており、新たなネットワークや市民交流も今まで以上に広がってきている。

2. 現在の主な業務内容と実施事業

(1) 視聴覚ライブラリー事業

本事業では、市民や学校の教育活動や視聴覚資料の作成支援を取組の柱としている。編集室を無償で開放しており、ビデオ編集や音楽加工、メディア変換・複製、プレゼンテーションデータ作成など、多様なニーズに対応できるよう環境整備・維持に努めている。職員は操作方法や設定方法、活用方法を教えるのみとし、実際の操作や処理は利用者が行うことで、「自らが学ぶ」という視点を大切にしている。

併せて、プロジェクターやスクリーン、DVDプレーヤー、ビデオカメラなどの視聴覚機器も一般に開放（貸し出し）している。視聴覚ライブラリーが図書館に併設しているため、図書と同じ感覚で貸し出しできるのも特徴のひとつとなっている。

また、本市には市内のビデオ愛好家で組織するビデオサークル「レインボー」がある。撮影状況により事業協力・支援を依頼するとともに、毎月の月例会に職員が出席するなど、サークルの育成支援にも取り組んでいる。



図書と同じ感覚で借りられる視聴覚機器

(2) 地域映像配信事業

本施設で力を入れているのが、この地域映像配信事業である。地域の出来事や伝統行事、特色ある取組、行政の記念事業などを、随時、ビデオカメラに収め、地域映像として配信する取組を篠山市発足時の平成11年から進めている。当初はVHSテープにダビングして各自治会に配布していたが、映像データのデジタル化と事業の効率化・集約化により、現在ではインターネットホームページ「丹波篠山インターネットTV」で配信している。



様々な出来事を業務用カメラで収録

これまでの取材・編集した作品だけでなく、過去のフィルム映像や貴重な資料等もデジタルデータ化し、コンテンツとして大きな広がりを持つようになった。市内外から多くの反響があり、地域映像を蓄積・活用していくことの意義を見出すことができる。

特に本市は、国史跡「篠山城跡」「八上城跡」や重要伝統的建造物群保存地区に選定された「篠山地区」「福住地区」、日本六古窯のひとつ「丹波焼」を有するなど、多くの歴史遺産や伝統文化、そして地域性が息づいており、その時々を表情を地域映像資料として残していく必要性を感じている。

また、大きなイベントやフォーラム開催時には、USTREAMを活用したライブ配信にも取り組んでおり、平成25年度からは、広報誌の映像版として月1回の「ライブ情報配信」を新設することとしている。

(3) 情報化推進事業

本施設の特色ある取組として「ICTふれあいサロン」がある。図書館展示ホールの一角にパソコン10台を設置し、誰もが気軽にパソコン操作や情報活用について相談ができ、指導が受けられるようにしている。

サロンを支えるのは、市民ボランティアからなるサポートスタッフ（平成25年3月現在で14人）で、それぞれの知識や技術、経験を活かした柔軟な対応により、市民の学びを支援している。単なる一過性の学習ではなく、パソコンを通じた仲間づくり・コミュニケーションづくりを意識した運営を行っているのも特徴のひとつである。



図書館の一角にある「ICTふれあいサロン」

平成24年度においては、利用者の意向を反映させるかたちで、サロンのサポートスタッフが主体となり、初心者向けのパソコン講習会を開催することができた。

(4) 全国ビデオコンクール事業（丹波篠山ビデオ大賞）

映像文化の発信力を高め、映像による人づくり・まちづくりを意図して取り組んでいるのが、全国アマチュアビデオコンクール「丹波篠山ビデオ大賞」である。「生きる」を不変のテーマとして掲げ、全国からビデオ作品を募集。2度の審査を経たノミネート作品を決勝大会当日に公開放映し、優秀作品を顕彰している。

常に新しい視点で運営してきたのも、ビデオ大賞の特徴となっている。平成24年度においては、携帯電話やスマートフォンで撮影した未編集映像の部門「ショート部門」を試験的に設定するなど、映像文化の可能性を追求してきた。

特に平成25年度は、25回目の節目の大会となることから、本市の魅力発信や新たな文化力の創造・進展、そして地域活性化に繋がるような事業を展開していく予定である。



「丹波篠山ビデオ大賞」で地域活性化を

3. 地域映像の収集と活用～丹波篠山インターネットTVの開設～

(1) 事業の概要

「丹波篠山インターネットTV」では、地域の出来事や伝統行事、文化財などの地域映像素材をハイビジョン画質で撮影・収集して内容の充実を図るとともに、適宜、ニュースやドキュメンタリー作品を制作して配信している。

現在ホームページのリニューアルを進めており、動画データを動画圧縮規格H. 264で変換・保存し、データベース化をすることによって、Web上で目的の動画がより検索しやすいシステムにしていく。また、所蔵しているフィルムやテープメディアはDVDにダビングして保存・管理していたが、すべてH. 264データに再変換し動画サーバーに保存した。同時に撮影した素材、編集データなどはブルーレイディスクでも保存し管理している。



「丹波篠山インターネットTV」のトップページ

【動画等の配信方法】

WMV型……………平成13年配信開始時からWMV（Windows Media Video）形式で配信（市内の出来事213タイトル、お便りビデオ175タイトル、スペシャル37タイトル、アーカイブス51タイトル）

YouTube型……………平成22年10月から、Youtubeにもチャンネルを作成しハイビジョン動画をアップロードしている（現在110タイトル、

チャンネル登録者78名、総動画再生回数171,416回3/27現在)
 USTREAM型……………2011年からUSTREAMでライブ配信した映像を録画したもの
 (現在10タイトル)
 音声データ型……………2007年からMP3規格で市の広報紙や篠山の民謡などを配信
 (現在193タイトル)
 データベース型………2012年から新ホームページでH.264規格のデータを3段階の
 画質で配信。独自のプレーヤーで再生(現在965タイトル)

(2) 事業を進める上での課題

動画配信ホームページを運営していく上で、撮影した映像を編集して作品に仕上げ、いかにタイムリーにホームページで配信できるかが一番の課題である。撮影したその日に配信するのがベストであるが、テレビ局のように様々な作業過程に専門のスタッフがいたわけではなく、担当の職員2人が、他の業務と並行して撮影から編集、配信の作業を行っているため、おおむね2週間～1ヶ月を目処に配信することを目指している。

たとえ即時に映像を配信できたとしても、肝心のホームページを見てもらえなければ意味がないので、ホームページに辿り着いてもらえるようPR、周知を行う必要がある。また、ページを見続けてもらうためには、地域の情報をこまめに更新し提供する必要がある。

カメラの撮影技術や映像の編集技術は一朝一夕には身に付かないが、即時性を維持するために技術や知識、経験を積み日々スキルアップを行うことが、これから地域映像の配信担当者の課題である。



USTREAMでのライブ映像配信の様子

前述のビデオサークル「レインボー」や、USTREAM配信事業のサポートボランティア「丹波篠山iTV登録スタッフ」などに運営協力をしてもらっているが、これからは地域映像カメラマンや番組のパーソナリティー、編集、配信の技術者を募集し、人材を発掘、確保していくことも運営上の課題だと考える。

(3) 自治会アンケートから

視聴覚ライブラリーでは、地域映像資料をデジタルデータ化して保存・活用する取組を進めている。地域の伝統行事や文化財(歴史文化遺産)、後世に語り継がれる地域行事を中心に取材活動を展開するにあたり、地域の実情や意向を把握するため、市内の各自治会長を対象に地域映像の活用に関する実態調査アンケートを行った。260の自治会の内144の自治会から回答があり、回答率は55%だった。

アンケート結果から、地域映像の保存・活用を視聴覚ライブラリーで進めているこ

とについて、約半数の自治会長が「知っている」と回答したが、視聴覚ライブラリーの利用については、「ある」または「家族や知人が利用」と答えた人は合わせて23%にとどまった。「ある」と答えた人のうち、利用用途について1番多かった回答が貸出機材の利用で42%、次いでDVDなどのメディアの複製が31%であった。

観たい地域映像の視聴方法については、「DVDに録画して」が35%、「図書館での貸出（DVD）」が30%で、インターネットでの視聴（21%）よりメディアでの利用の希望が多いことが分かった。

視聴覚ライブラリーが地域映像を配信しているホームページ「丹波篠山インターネットTV」については、78%の自治会長がまだ観ていないことがわかった。また、インターネット環境がないと答えた人が6%あった。



図書館のライブラリー制作映像コーナー

自治会の集会や地域の集まりなどで、昔の記録映像や行事のビデオ等を観ることがあるかについて、「ある」と答えた自治会は23%だった。また、自治会の施設にテレビやプレーヤーなどの機器がなく、環境が整っていない自治会が8%あった。

また、具体的に映像で残してほしい地域の行事などについては、63の自治会から約100件の収録希望があった。

(4) 今後の方向性

ホームページの更新に関して、従来ページと新しいデータベース型ページの両方を更新しているために作業が煩雑になってしまっているため、早急に新ページへの移行を進めることとする。YouTubeのチャンネル設定については、世界中から動画を見てもらえる可能性が高いため並行して続けていく。

今後、地域の映像の撮影を進めていくうえで、まずは各自治会から撮影希望のあった行事の内容などを聞き取り、視聴覚ライブラリーで撮影して残すべき行事かどうかの取捨選択を行う必要がある。

撮影希望のあった行事の中で、多かったのが地域の神社の祭礼であった。ほとんどが秋祭りで、時期は10月の毎週土・日曜日であるため、祭の状況などを勘案しながら複数年の計画で、ビデオサークル等と協力しながら撮影を進めていく。現在、コミュニティの場となっている地域の祭りを記録し後世に残すことも、地域メディアの役割であると考えます。



膨大な映像データをどう活かすか

記録・収集し蓄積してきた多くの映像を地域で活用してもらうためには、視聴覚ラ

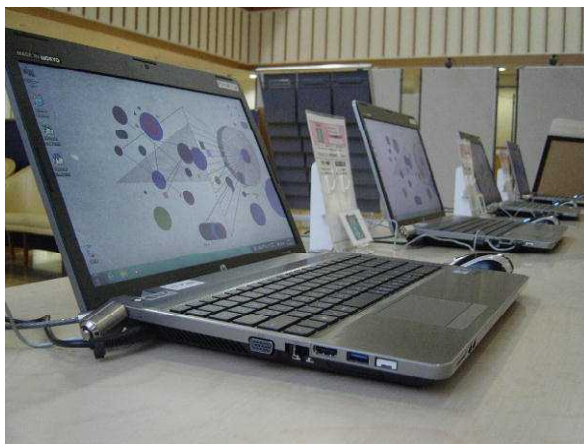
イブラリーがどのような映像を所有しているかを地域に伝える必要がある、地域でどのように活用してもらうかを提案し、ビデオ撮影などに興味・関心を持ってもらえるような働きかけも行っていきたい。

4. 情報化社会における市民へのICT支援～ICTふれあいサロンの運営～

(1) 事業の概要

平成13～14年度にかけて、国が掲げる「IT戦略」のもと、日本全体でパソコン講習会が開催されたが、市民がパソコンに親しむためには、学びの継続性を保ちつつ事後サポートをしていく体制づくりが必要と考えた。そこで、情報通信技術に関する市民の相談窓口として、平成15年度から、パソコンの操作や活用、情報（マルチメディア）活用を支援する場としてサロンを設置した。

当初は、指導者として「ITインストラクター」を設定し、市出資法人に業務を委託していたが、行財政改革の流れもあり、平成21年度からは市民ボランティア（サポートスタッフ）によるサポートに切り替えた。



サロン設置のノートパソコン

これが奏功し、サロン運営の大きな視点である「市民目線のサポート」が全面に出せるようになった。通常のパソコン講習会では、カリキュラムに沿った画一的な指導になりがちであり、それではパソコン活用の多様な市民ニーズには十分に答えられない、という考えが根底にある。

現在は、サポートスタッフが主体となってサロンの運営向上に繋げる取組が進みつつあり、平成24年度においては、初心者対象パソコン講習会の開催（サポートスタッフ主催、10回講座を2回）が実現している。

(2) 事業を進める上での課題

設置当初は、「初心者に対するパソコン活用の支援」が大きな目的だったが、パソコン環境の多様化や利用者の水準向上もあり、指導ガイドラインが曖昧になってきている。

まずパソコン環境にあっては、基本ソフト（OS）の度重なるバージョンアップが障害になっている。例えば、パソコンの持ち込みもできるため、年末から春先にかけてはWindows 8 搭載機の持ち込みが重なった。事務局はもちろん、スタッフも大半がWindows 8を経験していなかったこともあり、急遽、予備パソコンをやりくりして、Windows 8の指導用パソコンを新たに設置した経緯がある。

どこの自治体にも共通するわけだが、限られた予算のなかでの環境更新は負荷が大きく、なかなかすぐには対応できない。また、一般のパソコン教室でない以上、利用者の実態に応じ、これまでのOSを置いておく必要もある。

次に、利用者の水準については、初心者から上級者に至るまで、本当に様々である。

中には、スタッフの技術以上の高度な支援を求める利用者もあり、スタッフからも「どこまで教えたら良いのか」「当初の設置目的から外れている」といった意見もある。

かといって、あまり細かな線引きをしてしまうと、「ふれあいの場」という雰囲気を壊しかねず、スタッフの折角の技術・知識、そして熱意を無駄にしたくはない。

また、スタッフは全てボランティアのため、今後の人材確保が難しい。



パソコンの持ち込みにも対応

(3) 利用者アンケートから

アンケートは、平成25年2月20日～3月5日まで実施し、回答者は23人（実際の利用者は89人）であった。母数が少ないので、細かな比較はできないが、平成24年度における全体の利用実績（年間利用者数：2,070人）も踏まえながら、見ていくこととする。

利用者全体で見ると、60歳以上の利用が52パーセントを占めており、そのうちのおよそ半数（全体の28%）が70歳以上である。やはり、「情報弱者＝高齢者」という傾向が見て取れ、サロンが拠り所という人も多い。サポートを必要とする人も、中・高齢層に集中している。また、20歳未満の利用が22%と多く、子ども同士でパソコンゲームに親しんでいる光景も多い。

利用者アンケートのうち「サロンを利用するようになったきっかけ」については、約半数が、「初めてパソコンを購入」「パソコンを持っているが使い方がわからない」を理由としており、パソコンがテレビのような感覚では使えないことの現れだと捉えている。

「サロンを利用した感想」については、「生活に役立つようになった」「パソコンが面白く（楽しく）なった」という回答が65%を占めており、サロンでの学びが日常生活や生きがいに反映されていることが伺えた。また、「スタッフとの交流ができた」「図書館に来る回数が増えた」との回答が多かったのも印象的である。

自由意見でも「親切に教えてもらっている」との声が多数を占め、スタッフの励みになっているとともに、スタッフからも「より技術や知識を高めたい」との意見が聞かれ、学ぶ側・教える側、それぞれに前向きな取組が見て取れる。

ただし一方で、スタッフ間には技術力や教え方の部分で差異があるのは否めず、「スタッフの格差を縮めて欲しい」「曜日によって教え方が異なる」という意見も聞かれた。

(4) 今後の方向性

サロンには10台のパソコンを設置しているが、前述のとおり、複数OSの環境を維持する必要がある。現在、WindowsXP機が1台、WindowsVISTA機が1台、Windows7機が8台あり、指導用として、Windows7機1台、Windows8機1台を置いている。一

時期は機器更新のため、WindowsXP機を撤去していたが、スタッフの意向により再び復活させた。

指導ガイドラインの取り扱いについては、何度もスタッフと協議を重ね、結果、「各サポートスタッフの技術に応じてわかる範囲での指導」を基本とすることとした。従来のガイドラインは、原則として「ここまで」という線引きをしていただけに、より柔軟なサポートに繋がると期待を寄せている。



サポートスタッフ主催のパソコン講習会

このサロンは、スタッフの熱意と行動力によって成り立っていると言っても過言ではない。それぞれに得意分野があり、パソコンに対する価値観も様々である。パソコン環境が多様化しているからこそ、スタッフも指導方法も多様であって良いと考えている。ただ、利用者からすれば、同じ教え方や同じ対応を望む声もあるので、サポートが一方通行にならないよう、共通の意識を持つことも大切である。

その上で、利用者からの新しい課題が出れば、スタッフもステップアップしていく。その繰り返しの中で、今後も、活力に富んだサロン運営を目指していきたいと考えている。また、サロンの指導等により技術が向上した人を、新たなスタッフとして育成していくことも必要不可欠だと感じている。

5. ライフステージ「さらなる生きがいづくり」の拠点として

(1) 篠山市における「視聴覚ライブラリー」の役割

本施設は設置から40年あまりが経過しているものの、前述のとおり組織改編が相次いだため、実際の実績は、篠山市発足後の15年間と言っても過言ではない。今の拠点である中央図書館に移ってから10年しか経っておらず、まだまだ「視聴覚ライブラリー」の認知度は、100%とは言えない。しかし、各地の視聴覚ライブラリーが減少している状況にあって、篠山市に存続している意義は大きいと感じている。

本施設の最大の武器は「市民に開かれている」ことにある。そして、事業実績を様々なかたちで市民に還元してきたことも大きな要素である。この「市民還元」の視点を今後一層膨らませたいと考えている。

そのキーワードのひとつに「まちづくり」があげられる。「まちづくりは人づくりから」と言われるように、市民一人一人の活動が活発であれば町は元気になる。本市では、様々なまちづくりの取組が展開されており、そこに視聴覚ライブラリーの力が発揮できる余地がある。

映像制作や情報活用支援という型枠どお



市民が自由に使える編集室

りのサービスにとどまるのではなく、要は生涯学習としての視聴覚ライブラリーの専門性と技術力、そして発信力をどう活かすかである。市民に開かれていたからこそ、これまでも常に新たな視野を持つことができた。これからも市民とともにあるライブラリーとして、映像文化・情報発信の先陣を切り続けたいと考える。

【利用状況の推移】

編集室利用実績(件数)			
利用区分	H22年度	H23年度	H24年度
ビデオ編集	382	237	330
メディア複製	193	202	314
録音	20	14	9
ホームページ作成	22	26	18
その他	69	30	56
合計	686	509	727

視聴覚機器貸出実績(件数)			
貸出機器種別	H22年度	H23年度	H24年度
プロジェクター	121	137	136
スクリーン	67	86	93
ビデオカメラ (記録媒体含む)	118	126	147
ビデオカメラ用三脚	44	49	71
DVD・BDデッキ	19	25	39
VHSデッキ	9	1	3
その他	35	28	36
合計	413	452	525

ICTふれあいサロン利用実績				
		H22年度	H23年度	H24年度
利用人数		2,095人	2,108人	2,070人
主な利用目的	インターネット	51.4%	57.4%	45.2%
	文書作成	21.5%	17.3%	25.6%
	表計算	11.3%	9.4%	11.7%
	ホームページ作成	1.2%	0.6%	0.4%
	その他ソフト	3.0%	2.5%	2.6%
	質問	11.6%	12.8%	14.5%

(2) 「生涯学習」＝「3つのライフステージ」という考え方

篠山市教育委員会では、平成23年度より、教育全体を「0歳からの連続した生涯学習」として考え、①就学前、②義務教育、③社会教育の3つのライフステージを基本とした施策展開を図っている。ややもすれば、“教育＝学校教育”と論じられがちだが、本市では、学校を卒業してからの期間のほうが長いということに着目し、その視点で社会教育を捉えている。

また、本市では長年、『一人一人が光り輝き、生きがいをめざす～子どもが楽しく学び地域に信頼される学校園づくり、学びの機会を充実し誰もが学習の喜びを実感できるまちづくり～』を教育目標に掲げており、この「学習の喜びを実感できる」という



市民の生きがいづくりに向けて

ことが、どの世代にとっても大切だと考えている。

利用者から「ありがとう」「お世話になりました」の声を聞く度、生涯を通して学ぶことの核心に触れるような気がしている。市民の生きがいづくりの応援ができるよう、単なる画一的な行政サービスではない市民還元を可能な限り進めていきたいと考えている。

(3) 地域コミュニティをつなぐ情報文化・映像文化の拠点づくり

視聴覚ライブラリー施設は、従来、学校教育との繋がりが強く、視聴覚教材を揃え、機材の使い方を教え、必要に応じて研修を行うというスタンスが支配的であった。そのため、教育研修所や教育委員会事務局に併設される場合が多く、市民が気軽に利用できる環境ではなかったと言える。

これまでの経緯や事業の特性を考えると、図書館とひとつになったことが、大きな

起点だったように感じている。少しずつではあるが認知度も高まり、施設を利用する人や相談に来る人は着実に増えている。各団体や自治会（集落）とのネットワークはもちろんのこと、業務の幅も広がりを見せている。

今、本市では、各小学校単位による「まちづくり協議会」が全ての地区で立ち上がり、新たな地域コミュニティの創造や地域の活性化が進んでいる。視聴覚ライブラリーでも、平成25年度から地域の伝統行事や特色ある取組により一層焦点を当てることとしており、これまで蓄積してきた映像記録と併せて活用と発信を進めることで、さらなる情報文化・映像文化の拠点を目指したいと考える。



情報文化・映像文化の拠点として

(4) 次代への提言～まとめ～

「コミュニティメディア」とは、一般的に“コミュニティのメンバーみずからが、主体的に情報発信することができるメディアのこと”と定義されている。今、全国各地で、地域からの情報発信が行われているが、本市の場合、いつの間にか、視聴覚ライブラリーという一教育施設が、その一部分を担っていたという面白い事実を生み出してしまった。

しかし、それは、視聴覚ライブラリーの方向性を模索する中で、たまたま辿り着いた「可能性」なのかもしれない。パソコンの普及にあわせて急速に進展したデータの電子化・メディアの多様化は、視聴覚ライブラリーという施設の存在意義を失わせ、視聴覚教育という枠組みさえも揺るがした。正直なところ、篠山市発足時からの15年は、本当に試行錯誤の連続で、事業目標が定まらないこともあった。

その意味からすると、この可能性は篠山市という地域性ならではの産物と捉えたい。いや、捉えるべきだと思う。今、本市は、新しいまちづくりに向けて動き出しつつあるが、多くの歴史と伝統文化に彩られた「ふるさと篠山」の全てを私たちはまだ知らない。その時々表情を記録し、市民全体で共有し、全国へ発信し、そして後世に映像資産として残す……。これからの「篠山の時代」のまちづくりのために。



市民とともにある篠山市視聴覚ライブラリー

そして、そのノウハウを、あるときはビデオ教材作成基地として、あるときはパソコン活用支援拠点として、またあるときは地域活性化に向けた視聴覚オールマイティサポーターとして、活かしていきたいと考えている。

兼任の館長を含めて3人の職員数だが、常に市民目線をもって常に市民還元を意識して、これからも視聴覚ライブラリーという教育行政サービスに邁進していきたい。

【ホームページアドレス】

篠山市視聴覚ライブラリー

<http://www.city.sasayama.hyogo.jp/pc/group/av-library/>

丹波篠山インターネットTV

<http://videotube.sasayama.jp/index.php>

丹波篠山ビデオ大賞

<http://edu.city.sasayama.hyogo.jp/video/v-taishou/index.html>

YouTube

<http://www.youtube.com/user/sasayamaAVL>

USTREAM

<http://www.ustream.tv/user/sasayamaTV>

【facebookページ】

視聴覚ライブラリー

<https://www.facebook.com/sasayamaAVL?ref=hl>

丹波篠山ビデオ大賞

<https://www.facebook.com/videotaishou?ref=hl>